

立正大学地理学教室における地図・図書資料の活用[#]

高木 亨* 瀬戸 真之** 高田 明典*

キーワード：地図、図書資料、資料室、学部教育

I. はじめに

1. 研究の課題と目的

21世紀に入ると、学部再編などにより「地理学」を看板に掲げる大学の減少が目立ちはじめた。さらに、学生募集でも地理学の専攻を希望する学生が減少し、地理学会などでは、地理学の活性化が多く叫ばれるようになった¹⁾。しかしながら、このような状況からの脱却は、一朝一夕には難しく、劇的な改善を望むことは困難といえよう。一方、一般社会においては、「地図ブーム」といってもいいように、地図を活用した動きがみられている。

立正大学地理学教室では、他の地理学系の学部・学科と同様に、各種資料ならびに地図類を収集し、研究および教育で積極的に活用してきた。もっとも、これら資料・地図の利用主体は教員や大学院生がほとんどであり、学部学生（以下、学生）の利用は、教員側からの働きかけによる野外巡検の準備やレポート作成、卒業論文の執筆など限られたものであった。また、その資料の存在や利用方法などは、教員や先輩を通じて知るしか方策がなかった²⁾。

このため教室では、所蔵する資料・地図を学生が容易に利用できる環境を整備することが課題であった。学生自らがこれら資料を積極的に活用することができれば、学生自身の資料探索能力が向上するとともに、「地理学」の面白さの体得につながるといえる。さらに、卒業後、一般社会でその魅力を伝えられるようになれば、広い意味での地理学の活性化に役立つと考えられる。

教室の熊谷校舎移転にともない、施設面では改善されたといえる。しかし、活用のための「ソフト」の部分が改善されたとは言い難い状況である。これまで、資料・地図の所蔵されている資料室について、学生の認識を把握することはなされたこなかった。今後「ソフト」面の改善を図る上で、資料室について学生の認識を知ること

は、重要であると考えらる。

さらに、これまでの研究活動の蓄積により収集された膨大な資料・地図のさらなる活用は、大学の社会貢献が叫ばれる時代において、有効な社会貢献の一つとなりうるものである。こうした観点からも、一教室の事例ではあるが、学生の資料室認識を知ることが、資料・地図の一般公開にむけての準備資料として有用であるといえる。

そこで本研究では、立正大学地理学教室を事例とし、その資料室について、まず学生の認知度を把握し、どのようなきっかけで資料室を認知したのかを明らかにする。さらに、実際に資料室を利用する学生へのアンケート調査から資料室利用実態を明らかにすることを目的とする。

研究対象としたのは、立正大学地球環境科学部地図室（以下、地図室とする）についての利用である。立正大学地球環境科学部には、「図書資料室」と呼ばれるレファレンス機能や新着雑誌・統計資料・専門書が配架されている資料室と、本研究対象の「地図室」と呼ばれる、文学部地理学科時代から所蔵する地形図や地質図などの地図資料と地理学関係の雑誌バックナンバーや市町村誌が配架されている資料室の二つの資料室がある（表1）³⁾。

立正大学地球環境科学部は文学部地理学科の流れをくむ地理学科と環境科学を中心とする環境システム学科から構成されている。地理学関係教員が両学科に配置されていることから、地理学教室と称した。本研究では、主に地理学科の学生を対象とし、地理学教室関係資料を多く収蔵しており、地理学科学生の利用が多いと思われる地図室を対象とした。

なお、地図室では、2002年から文部科学省オープンリサーチセンター事業の一環として、地図整理ならびにデータベース化が進められており、2005年現在、地図データベースが仮運用されている⁴⁾。

* 立正大学大学院オープンリサーチセンター

** 立正大学地理学教室

2006年度立正大学大学院地球環境科学研究科オープンリサーチセンター業績

表1 地球環境科学部の資料室

名称	図書資料室	地図室
配架資料など	雑誌 (最新号)	地形図 (新・旧)、外国地形図
	専門書・テキスト	アトラス・市史など
	統計類	雑誌バックナンバー、他大学紀要
	レファレンス	空中写真 (管理のみ)

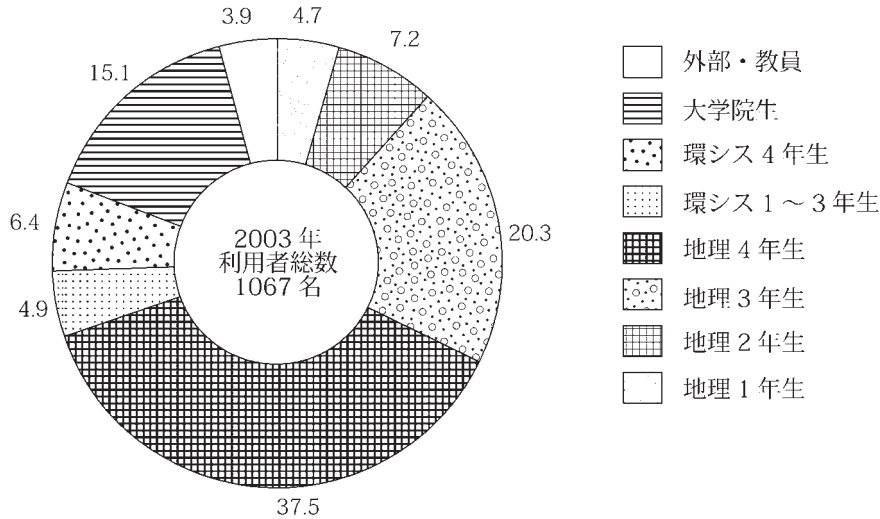


図1 2003年度年間利用者の所属別割合

凡例中、「地理」は地理学科学生、「環シス」は環境システム学科学生を指す。図中の数字はパーセントを表す。

2. 調査方法

本研究では、地理学科全学生に対するアンケート調査と地図室を利用した学生に対するアンケート調査の二つのアンケート調査を実施した。二つのアンケート調査とも、地図室の認知や利用目的・方法を中心とした質問項目とした。

まず、地理学科全学年学生対象のアンケート調査は、2005年4月6日の「学年別ガイダンス」時に、配布・記入・回収したもので、回答数(回答率)は1年135(97%)、2年115(86%)、3年129(88%)、4年143(81%)であった。地図室をほとんど利用したことのない1年生に対してアンケート調査を実施した理由は、今後の地図室認知・利用の経過を知る上での基礎資料とするためである。

次に、地図室利用者対象のアンケート調査は、2005年4月13日から4月28日までの14日間(日曜日を除く)に地図室を利用した学生・大学院生に対して実施し、回答数は104であった。この期間は、1期⁵⁾の講義が開始直後であり、4年生の卒論ゼミや3年生のゼミ⁶⁾が本格的に始まる前で、地図室利用について積極的に利用してい

る学生の状況を把握するには最適な期間であった。

II. 地図室の利用状況

学生の地図室利用実態に入る前に、学生の地図室利用状況について述べる。資料は、地図室利用の際に学生に「学籍番号」と「名前」を記入させている地図室利用簿を用いた。2003年度の地図室利用者数は、年間延べ1,000名を越え、1,067名であった。2004年度でも年間1,074名で1,000名を越えており、年平均1,000名程度の利用があることがわかる。

利用者の所属別割合をみると、2003年度では地理学科4年生37.5%、地理学科3年生20.3%、大学院生15.1%と地理学科の3年生以上の利用割合が高い(図1)。大学院生は、所属者数が学部学生と比較して少ないが⁷⁾、高い頻度で利用していることが読み取れる。一方、地理学科1年生と2年生の利用が少ない。とくに、専門科目やフィールドワークで利用する機会が多いと思われる2年生が7.25%と少なく、1年生(4.75%)と大差がなかった。ただし、学年が進行するにつれ、利用者がほぼ倍増

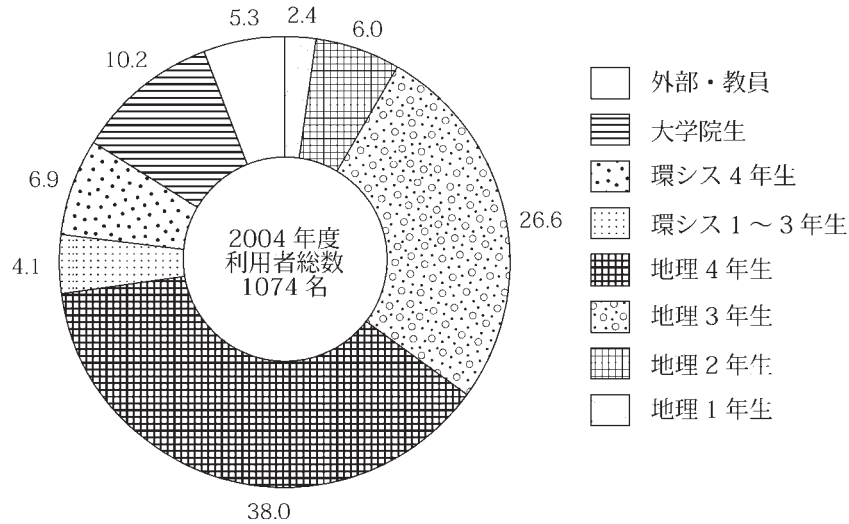


図2 2004年度年間利用者の所属別割合

凡例中、「地理」は地理学科学生、「環シス」は環境システム学科学生を指す。図中の数字はパーセントを表す。

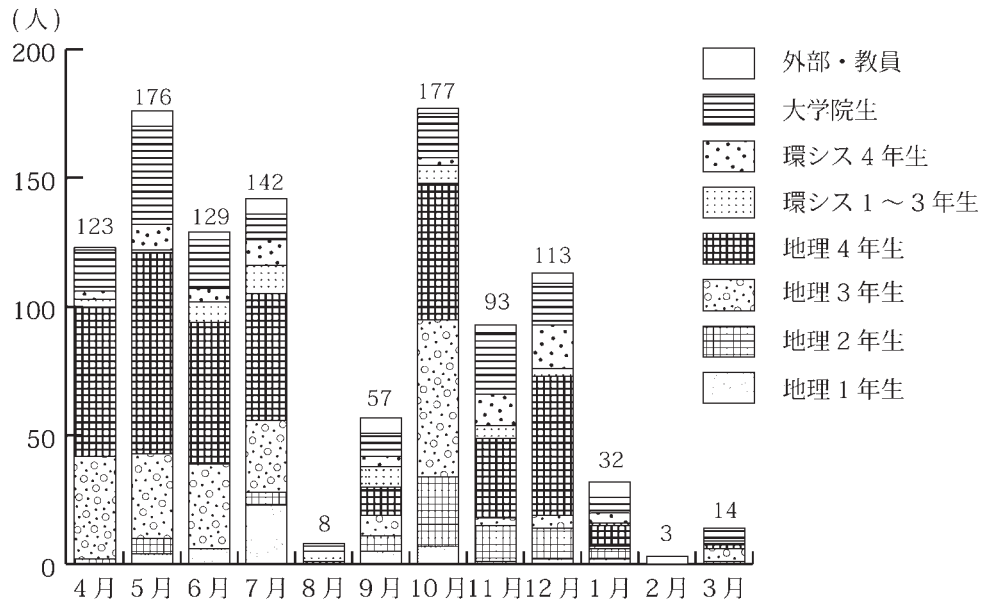


図3 2003年度月別利用者数とその内訳

凡例中、「地理」は地理学科学生、「環シス」は環境システム学科学生を指す。グラフ上部の数字は、利用者数。

している傾向が読み取れる。

2004年度でも、前年度と比して利用傾向に大きな差は認められない(図2)。地理学科学生の利用においては、前年度同様3・4年の割合が50%を超えている。1・2年生の割合は10%を切っており、前年度より少なくなっている。上位学年の利用割合が高くなる一方で、1・2年生の利用割合が低くなっている傾向がわかる。

また、環境システム学科学生の利用は、両年度とも地理学科学生と比べると少ない。これは、環境システム学科での、地図類の利用が少ないことと、地図室に配架さ

れている学術雑誌が地理学関連のものが中心のためといえる。環境システム学科の学年別の利用傾向は4年生が最も多く、3年生以下はあまり利用されていないことが読み取れる。

次に、両年度の月別利用傾向をみる。2003年度では、夏期休暇中⁸⁾の8・9月と冬季・春季休暇中の1～3月以外の授業期間で、月平均90名以上の利用がみられる(図3)。1期(4～7月)の利用者は、各月とも120名を超えていた。1期の利用のピークは5月で176名であった。2期(10～12月)⁹⁾は1期に比べると少ないが、90

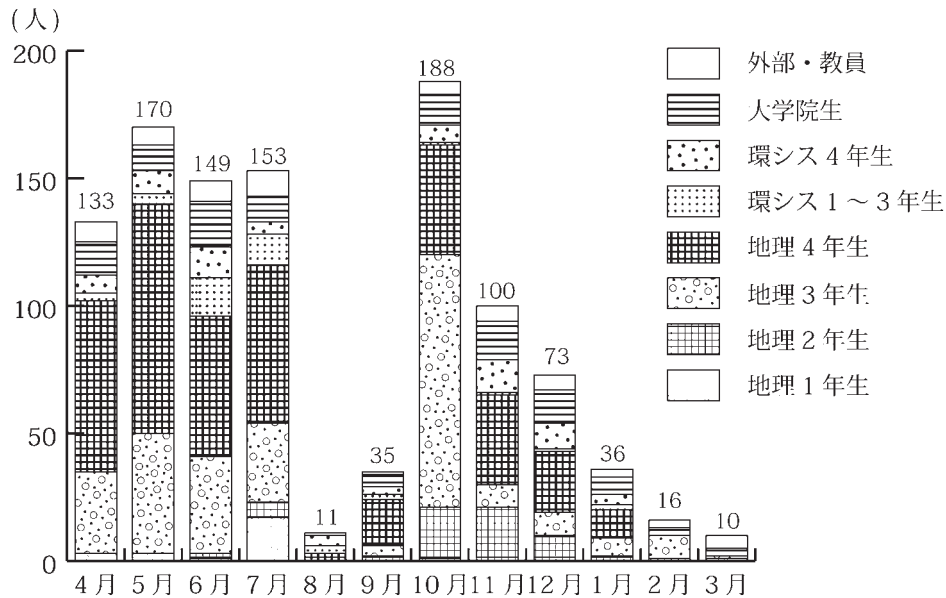


図4 2004年度月別利用者数とその内訳

凡例中、「地理」は地理学科学生、「環シス」は環境システム学科学生を指す。
グラフ上部の数字は、利用者数

表2 地理学科の主な行事

期	月	主 な 行 事
1期	4月	ガイダンス (全学年)
	4月中旬～	卒業研究指導 (卒論ゼミ) 開始
	5月～7月上旬	基礎フィールドワーク (1年生対象; 1泊2日)
	〃	セミナーおよびフィールドワーク (3年生対象; 1期演習+集中3泊4日)
	8月～9月	夏季休暇
2期	10月	次年度卒業研究指導申し込み締切 (3年生対象)
	10月～12月	地理調査法およびフィールドワーク (2年生対象; 2期演習+集中3泊4日)
	12月	次年度フィールドワーク申し込み締切 (1・2年生対象)
	1月上旬	卒業論文提出締切
	1月下旬	卒業論文発表

名を超える利用があった。2期のピークは10月で、177名の利用があった。

2004年度でも同様の傾向があるが、2期の利用に、前年度とは若干異なる傾向が見られた (図4)。1期は5月の170名をピークに各月とも130名を超える利用があった。2期にはいと10月の188名をピークに利用者は徐々に減少していった。

両年度とも特徴的なのは、5月と10月に利用が集中すること、7月に1年生の利用が増えることである。これは学科の行事によって影響を受けていると考えられる (表2)。1期には、1年生の必修科目「基礎フィールドワーク (半期集中)」・「基礎地図学および実習 (通年)」や3年生の必修科目「セミナーおよびフィールドワーク (1期ゼミ+集中)」、4年生の「卒業研究指導 (通年)」

が開講されている。地図室利用がピークを迎える5～6月には、4年生の「卒業研究指導」でのゼミ発表が本格的に始まり、1年生および3年生の「フィールドワーク」が集中して開講される。また、7月には、1年生および3年生の「フィールドワーク」のレポート提出締切が設定されることが多い。

2期には、2年生必修科目の「地理調査法およびフィールドワーク」が開講され、これまで、ほとんど利用がみられなかった2年生の地図室利用が増える。これらに加え、3年生の利用が急増することにより、10月に利用のピークを形成している。

地理学科では、翌年度の「卒業研究指導」のゼミ配属希望調査を前年の夏季休暇前から休暇明けにかけて実施している。その際、卒業論文のテーマ、目的、方法、参

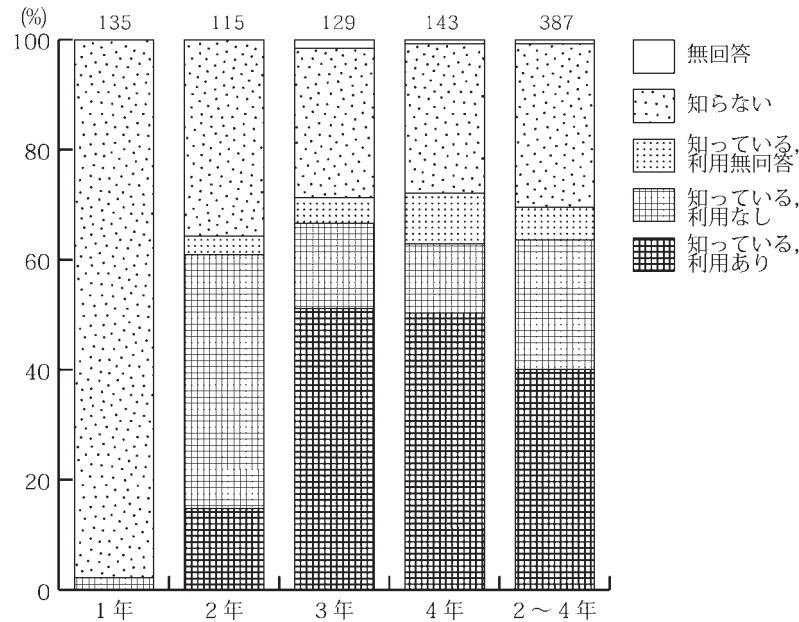


図5 学生の地図室認知と利用経験
図中の数字は回答総数。

考文献などを記入した「エントリーシート」の提出を必須としている。2003年度は7月に募集、10月締切、2004年度は9月末に募集、10月末締切という日程でおこなった。3年生は、このエントリーシート作成に必要な文献検索のため地図室を利用している。このため、エントリーシートの提出期限近くでの、3年生の地図室利用が急増している。一方で、2期には地図室利用に直接結びつく科目がないため、1年生の利用がほとんどみられない。

このように、地図室の利用は学科の行事、とくに必修科目に関わる行事に左右される傾向にあることが読み取れた。さらに、これらの行事の有無が、学年別の利用率の違いとなってあらわれることがわかった。

Ⅲ. 学生の地図室に対する認知度

次に、地理学科学生全員に対して4月上旬に実施したアンケート結果から、地理学科学生の地図室に対する認知度について検討する。

学年別の地図室認知度は、4年生(72.0%)、3年生(71.3%)、2年生(64.3%)、1年生(2.2%)となった。入学したばかりの1年生を除く2~4年生全体での認知度は、約70%と高くなっている(図5)。上位学年ほど地図室の認知度が高いのは当然である。しかし、4年生と3年生の認知度の差は0.7%であり、2年生と3年生の差に比べるとその差は小さい。また、4年生のうち約3割の学生は地図室の存在を知らないという結果となっ

た。

さらに、地図室を認知している学生のうち、地図室の利用経験がある学生は、4年生(50.3%)、3年生(51.2%)、2年生(14.8%)となった。4月最初のガイダンスでの調査であり、1年生の利用経験者はいなかった。全学年を通じて、地図室を知っていても、利用したことのない学生が比較的多い。2年生は地図室を認知しているものの、1年生の時に地図室を利用したことがない学生が大半を占め、3年生以降も約半数の学生は、地図室を利用したことがなかった。

つぎに、地図室を認知している学生がどのような経緯で、地図室を知るようになったのか、地図室認知のきっかけについてみた。全学年を通して「授業」という答えが55.1%と最も多く、次いで「教員」(15.0%)、「友人」(11.3%)、「学科ガイダンス」(10%)、「先輩」(4%)、「学部パンフレット」(3.7%)、「学科ホームページ」(1%)の順となった(図6)。

学年別にみると、低学年ほど「授業がきっかけ」という割合が低く、ガイダンスや友人・先輩など、地図室を知るきっかけが多様である。一方、学年が上がってから地図室を認知した学生は、主に授業を通じてのみ、つまり必要に迫られて地図室の存在に気づき、利用する姿が浮かんでくる。

地図室の利用目的と利用資料では、授業・フィールドワーク関係が多く、4年生の卒業論文のための利用が少ない。これは、4月上旬にアンケート調査を実施したた

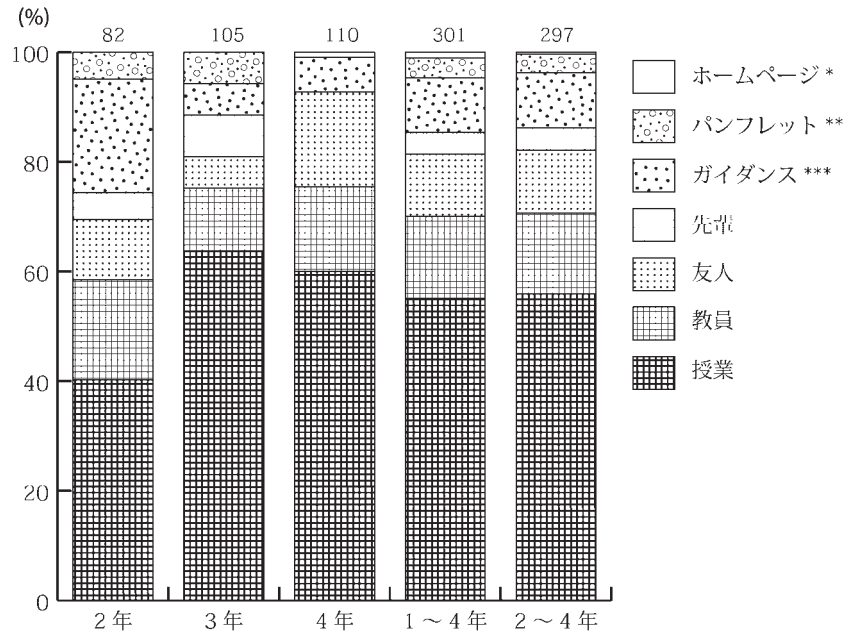


図6 地図室認知のきっかけ (複数回答)

* 地理学科ホームページ <http://www.ris.ac.jp/chiri/>
 ** 学部パンフレット
 *** 地理学科学年別ガイダンス
 図中の数字は回答総数

め、この時点での利用が少なかったと考えられる。3年生では地図利用が最も多く、フィールドワークや授業のためという回答が多かった。4年生になると、フィールドワークや授業での地図利用とともに文献利用も多い。これは、フィールドワークの授業内容によると考えられる。2年生の「地理調査法およびフィールドワーク」ではおもに調査法や地域の観察を重視するのに対し、3年生の「セミナーおよびフィールドワーク」では卒業論文に向けてより実践的な調査の組立や分析をおこなうことが多い。また、「卒業研究指導」では多くのゼミで論文紹介を取り入れている。このため、4年生では今後文献利用が多くなることが予想される。

資料の検索は、各学年とも苦労している様子が見受けられる。地形図については、2004年度は新方式での整理中¹⁰⁾であり、学生に混乱が見られたようである。また、文献資料についても検索端末が未設置であったため、目的の資料が見つかるまで、ある程度の時間を要している。

一方、地図室を利用しない学生にその理由を聞いた(図7)。地図室を認知しているが「利用経験がない」学生であった(図7a)では、各学年とも「地図室の利用の仕方がわからない」という回答が最も多かった。さらに、「文献・地図を必要としない」も2年生に多いほか、上級生にも少なからずみられた。また、「地図室の場所

がわからない」は数が少ないものの、各学年に回答があった。地図室利用経験の「無回答」学生では、地図室の場所がわからない、利用方法が不明といった回答が多かった(図7b)。これに対し、地図室を利用したことがあるが、「利用しない」学生からの少数の回答があった(図7c)。彼らは、地図室を利用してはみたものの、利用方法がわからず、また文献類が不要であったため使わない、という傾向が読み取れる。文献類が少ないから利用しないという回答は、さほど多くなかった。

問題は、上位学年になっても地図室利用に消極的な回答があることといえる。1年生の間に地図室利用について働きかけるなど、早期に地図室利用を体験させることが、今後の学生指導の課題といえる。

地図室以外での文献資料の入手先は、3年生以上では「大学図書館」が最も多く、次いで「学部図書資料室」、「インターネット」の順となっている。2年生では「インターネット」が最も多く、次いで「大学図書館」、「学部図書資料室」の順である。また、必要な「文献資料を購入」している学生は、各学年とも一定数いることがわかる¹¹⁾。全学年を通じてみると、「大学図書館」と「学部図書資料室」の利用が40.2%となり、多くの学生が学内の地図室以外の資料室を使っていることが分かった。一方、「他大学の図書館」を利用している学生は、かな

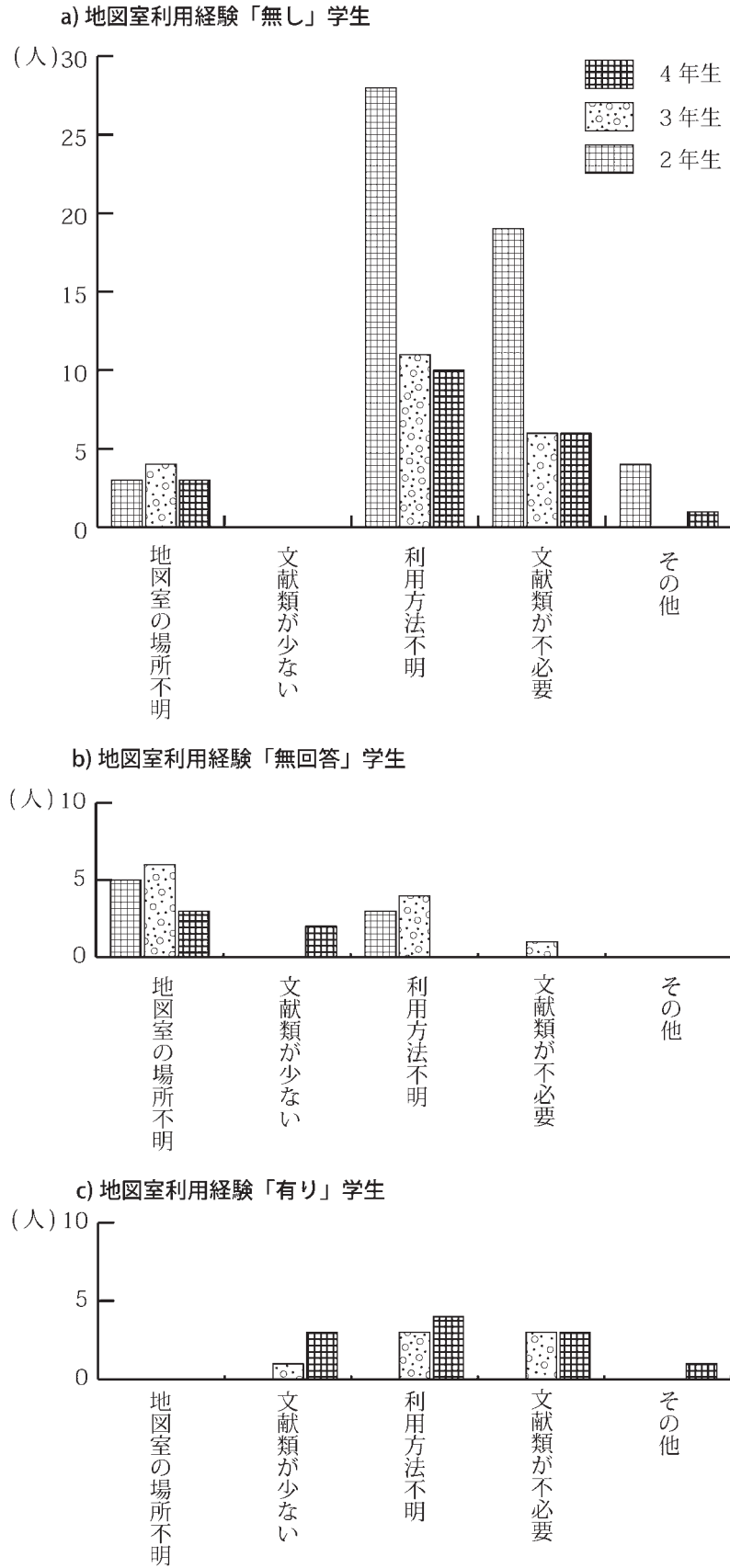


図7 地図室を利用しない理由
凡例は各図共通

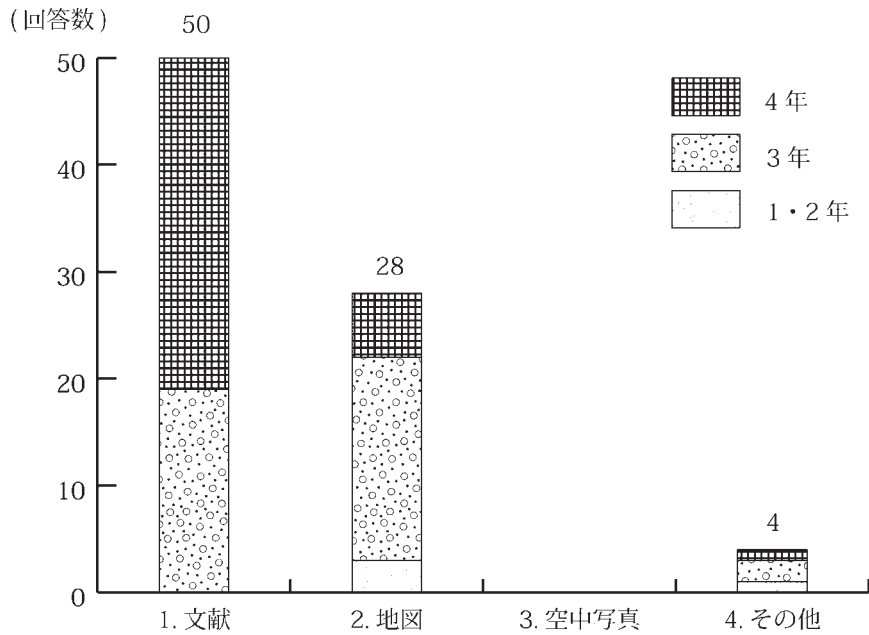


図8 地図室利用地理学科学生の利用目的 (複数回答)

り少なかった。立正大学地理学教室のある熊谷市は、東京都内から鉄道で約1時間と片道約1,000円超の交通費がかかる。また、他大学が周囲には立地していない。こうした立地条件を反映しているものといえる。

「インターネット」での資料収集は、2年生に多いことが特徴的である。ただ、インターネットのみで資料収集しているという回答はさほど多くはなかった。これらから、資料収集手段の一つとして、インターネットを活用している学生の姿が読み取れる。また、資料収集の手段が一つではなく、複数存在していることを示している。

IV. 地図室利用学生の利用実態

本章では、2005年4月の調査期間内に地図室を利用した学生に対するアンケート結果の分析をおこなう。調査期間での地図室利用者の内訳は次の通りである。期間中のアンケート回答者総数は108名であった。内訳は、地理学科学生が85名、環境システム学科学生が16名、その他(大学院生を含む)7名であった。このうち、地理学科学生について分析を進める。地理学科学生を学年別にみると、1年生3名、2年生1名、3年生39名、4年生37名と3・4年生の利用が中心となっていることがわかる。3・4年生に利用が偏っているのは、前述したとおり、地理学科の行事と関係している。

利用者の大半は、地図室に旧版を含む地形図や和雑誌・洋雑誌などの資料が収蔵されていることを知っていた。しかし、3年生で5名、4年生で3名がどんな資料が収

蔵されているか「知らない」で、地図室を訪れていた。

地図室の利用目的では、回答総数82のうち、文献目的が50、地図目的が28、その他4となっている(図8)。主な利用目的が文献検索にあることがわかる。このうち、3年生は文献目的と地図目的がともに19と同数であった。一方、4年生では文献目的が31、地図目的が6と文献目的の利用が多かった。地図目的では、数は少ないが1期にフィールドワークのある1年生の利用もみられた。その一方で、2年生はフィールドワークおよびそのゼミが2期に開講されるため、利用は少ない。

文献利用について詳細にみると、その利用目的は3年生と4年生によってはっきりと分かれる(図9)。4年生は「卒業論文」に特化しているのに対し、3年生は「フィールドワーク」、「授業」に分かれている。アンケート調査を実施した期間は、4年生の「卒業研究指導」、3年生の「セミナーおよびフィールドワーク」のゼミが始まっている。ゼミで使用する文献を求め、地図室を利用する学生の姿が浮き彫りになった。その際、求めていた文献が容易に探し出せたかという問いに対し、多くの学生が「容易に文献を探し出した」としている。これは、全体アンケートの結果と若干異なっている。地図室の利用に慣れている学生の利用が多かったと思われるが、詳細は不明である。

地図利用の場合は、文献とは利用目的が若干異なった(図10)。地図利用目的で最も多かったのは、「授業のため」であった。とくに3年生の利用が多くみられた。3年生が多く履修している専門科目での指示があったため

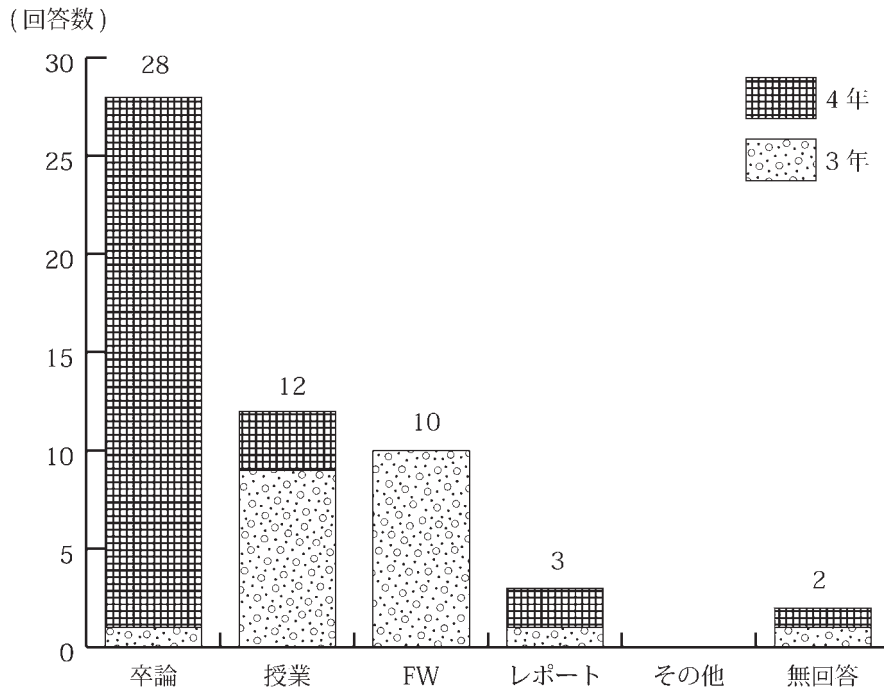


図9 地理学科学生の文献利用の目的 (複数回答)

と思われる。学生は地形図の利用目的が大半であり、とくに2万5千分1地形図が多かった。また、3年生では、所蔵最新版のほかに複数年次の旧版地形図を探す学生もみられた。

2万5千分1地形図は、旧版地形図を含め図幅名とフォルダによる整理を進めており¹²⁾、検索および複数年次地形図の利用が容易になっている。2005年4月の時点では、新方式での整理がかなり進んでいた。このため、地形図の検索は、おおむね好評であり、比較的容易に目的の地形図を探し出していることがわかった。

文献や地図資料の検索方法について、自由回答を求めたところ、「パソコンを利用している」、または「パソコンによる検索方法の整備を求める」意見が、回答した27名のうち9名から出ていた。地図室に配架されている「購入雑誌」は、大学図書館の検索システム¹³⁾において検索が可能となっている。しかし、地図室に雑誌検索用のパソコンが配置されておらず、こうした回答が寄せられた。なお、地形図検索用パソコンは、地図データベース整備の進展にともない、2005年度後半に地図室に設置している。

V. まとめと課題

本研究では、学部学生へのアンケートから、立正大学地理学教室における地図室の利用実態を明らかにした。これまでの検討から、得られた知見は次の通りである。

年間を通じた利用者の所属をみると、地理学科3年生以上の利用が最も多い。一方、2年生の利用が少なかった。月別の利用者数の変化では、5月と10月に利用が集中していることがわかった。また、1年生の利用が7月に増える特徴があった。これらの利用傾向は、学部・学科の行事や必修科目など授業に関連しての動きであることが明らかになった。

「地図室」の学生の認知度は、入学したばかりの1年生をのぞくと、約7割であった。しかし、4年生でも3割の学生は「地図室」の存在を知らなかった。「地図室」を知るきっかけは、上位学年では「授業」であり、低学年ほど多様であった。地図室の利用目的では、授業および「フィールドワーク」が多く、その内容と大きく関連していることがわかった。

一方、地図室を利用したことがない(利用しない)学生は、その理由に、利用の仕方がわからないことを挙げている。また、上位学年でも、地図室利用に消極的な意見が少なくなかった。

実際の地図室利用者は、4年生の文献検索を目的とする学生が多く、次いで3年生の地図利用目的であった。検索方法や資料の利用方法など、地図室の利用方法については、おおむね好評であった。さらに、パソコンによる検索方法の確立を求める意見もあった。

これらの結果からは、いくつかの問題点が指摘できる。とくに学年間の利用率の差異と低学年の利用率が低いこと、高学年においても利用方法がわからないといった点

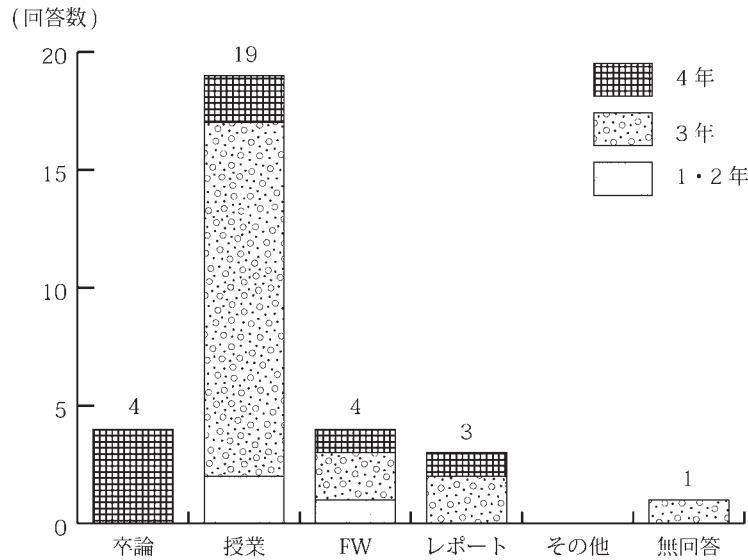


図10 地理学科学生の地図利用の目的 (複数回答)

である。これらを改善するため、2005年度末に「地図・資料利用案内¹⁴⁾」と題するリーフレットを地理学科で作成し、2006年度4月のガイダンス時に各学年に配布した。これにより、1年生からの地図室利用方法周知について改善をおこなった。さらに2006年度も同様のアンケートを実施しており、地図室についての認知がどの程度深まったのか、検討していきたい。また、将来の一般公開を考慮し、大学周辺の小中学校・高等学校、図書館・公民館などへリーフレットを配布した。地域に開かれた大学として、その利用を推奨していきたいと考えている。

謝 辞

アンケートに協力いただいた学生諸氏に感謝する。また、立正大学地理学教室の各先生方には、大変お世話になりました。謝意を表します。本研究は、立正大学大学院オープンリサーチセンターのプロジェクトとしておこなったものである。

注

- 1) 2006年春季の日本地理学会では、「地理学教室の教育体制の現状」をテーマにシンポジウムが開かれた(杉浦ほか, 2006)。立正大学地理学教室では、様々な取り組みについての発表をおこなった(内山, 2006)
- 2) 立正大学地理学教室は、1998年に大崎校舎から熊谷校舎へと移転した。移転以前の大崎校舎には、開かれた形式での学科資料室はなく、教員や院生の他は、一部学生しかその存在を知らないような、利用しにくい環境下にあった。こうした状況は、熊谷校舎移転にともない、資料室が設置され改善された。
- 3) 図書資料室には、学部で雇用されたレファレンス担当者が1名勤務しており、学生の資料相談に対応している。一方地

図室には、地形図整理のために地理学教室で雇用した地理学科卒業生と研究生の2名が勤務しており、地形図整理の傍ら、学生のレファレンスにも対応している(2005年4月現在)。

- 4) 地理学教室で所蔵している地図類すべてをweb上で検索可能にするシステムを現在構築中である。2004年度から2万5千分1地形図の入力作業を開始し、一部検索可能となっている。URL: <http://rissho-map.jp/>
- 5) 立正大学では2期制をとっており、前半を1期、後半を2期と呼んでいる。
- 6) 地理学科では4年次に卒業論文を必修としており、その作成・指導をおこなうのが通年で開講される「卒業研究指導(卒論ゼミ)」である。3年次には、3泊4日の野外実習(フィールドワーク)をとまなう半期(1期開講)のゼミ「セミナーおよびフィールドワーク」が必修となっている。
- 7) 2003年の在籍大学院生数は19名、翌2004年は13名である。
- 8) 開室日は、通常月曜から土曜日である。夏期休暇中は、月曜から金曜を開室しているが、ロックアウト期間を含め2週間程度閉室している。
- 9) 2期は1月2週目を含むが、便宜的に12月とした。1月は実質学年末試験期間となっている。
- 10) 2002年度から立正大学大学院オープンリサーチセンターによるプロジェクトの一環として、地形図整理をおこなっている。2004年度は、地形図整理の中途段階にあり、従来からの年代別整理と新しい図幅名による整理方法が混在していた時期である。
- 11) 大学周辺に、地形図を取り扱う書店が無いため、フィールドワークで使用する地形図は、各フィールドワークごとにまとめて購入することが多い。
- 12) 図幅名をインデックスとして、同一図幅の複数年次を一つのフォルダに収納して管理している。このため、同じ図幅での経年変化をみるには、適した地形図管理方法となっている(高田ほか, 2006)。

- 13) 立正大学図書館の蔵書検索システム ROAD (Rissho Online Access Database) により, 図書登録されている雑誌については, 検索可能である.
- 14) 地図室に配架されている雑誌類の紹介ならびに文献検索方法の解説, 地形図検索の方法とデータベースについての説明などを記載したリーフレット.

引用文献

- 内山幸久 (2006) : 立正大学地理学科の教育体制の現状. 日本地理学会発表要旨集, 69, p.26.
- 杉浦芳夫・村山祐司・中川章 (2006) : 地理学教室の教育体制の現状. 日本地理学会発表要旨集, 69, p.24.
- 高田明典・矢崎真澄・瀬戸真之・高木亨・半澤実奈子・島津弘・岡村治・片柳勉 (2006) : 立正大学地理学教室における地形図の整理とその利用 (発表要旨). 地域研究, 46(2), pp.94 - 95.

On the Utilization of Map Library in Department of Geography, Rissho University

Akira TAKAGI*, Masayuki SETO*, and Akinori TAKADA*

*Department of Geography, Rissho University

Keywords: maps, Journals, map library, college education